（様式２）報告書

令和５年度　授業改善実践研究校報告書　可部中学校

1　学校の課題

全国学力・学習状況調査ではどの教科も広島県の平均より下回る結果が続いており、特にここ数年数学では毎年−5%程度を推移している。令和4年度の結果を詳しく分析したところ、数学の正答率 30%未満の生徒が 32.1%と広島県平均よりも 4%ほど高かった。また、選択肢のある問題では無回答率が 0%に近いものの、記述式問題では無回答率が広島県平均より 2～3 %高く、難しい課題を試行錯誤したり自分の考えを説明したりする力が不足していると考えられる。

一方で令和4年度の本校生徒の質問紙調査の回答と教科の正答率を相関分析したところ、「授業で自分の考えを発表する時に工夫をしている」「話し合う活動で自分の考えを深めたり広げたりしている」「学習した内容をふり返り、次の学習につなげている」の質問項目で強い正の相関が見られた。

以上のことから、授業の中で試行錯誤して考えたり、自分の考えを深めたり広げたりする良質な機会を設けることで、本校生徒の確かな学力の定着につなげていきたいと考え、以下の研究主題を設定した。

2　研究主題

試行錯誤しながら思いや考えを表現していく生徒の育成

～必然性のある単元計画と生徒自らが「やってみたい」と感じる課題設定を通して～

3　取組内容

(1) 可部中授業スタイルの見直しと再構築

・マニュアルとして形骸化していた可部中授業スタイルを見直し、A4 用紙１枚の簡潔なものを作成する。

・話し合い活動を通して生徒の関わりを増やし、支持的風土のある学級づくりをする。

・話し合い活動の仕方を指導し（図１−①、１−②）生徒に意識づけをする。

・道徳の授業では話し合い活動をさせ、その際には生徒の役割分担を指示する。

・１人１台端末を活用した授業計画に挑戦する。

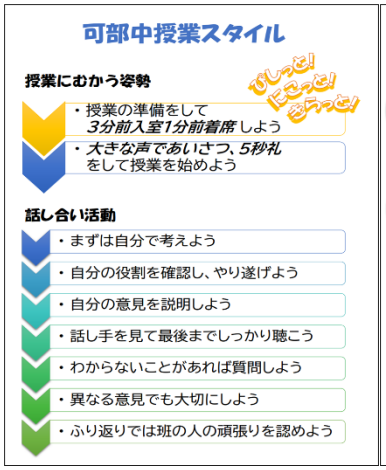

図１-①

図1-②

(2) 必然性のある単元計画の作成

・全ての教科で１つ以上作成し、単元を貫く課題と単元を通した生徒の姿を明確化する。

・単元のまとまりを意識しながら、本時で生徒が試行錯誤できる課題を設定する。

(3) 校内授業研究会の実施

・全教科で１回以上、教科内授業研究会を行う。

・試行錯誤できる課題を設定して話し合い活動をさせ、その効果を協議する。

4　検証結果

・生徒を対象とした校内アンケート調査

＜指標＞

年に2回（5月、12月実施）のアンケート調査で、話し合い活動や学習に向かう姿勢に関する項目の肯定的回答の割合が増加する。

＜結果＞

・全学年での肯定的回答をした生徒の割合（%）

	5月	12月
授業が楽しいと感じる	75.1	73.8
授業では、進んで話し合い活動に参加し自分の考えを説明している	74.9	76.3
自分と違う意見について考えるのは楽しい	70.0	68.0
授業では、話し合い活動をすることで、自分の考えを深めたり、広げたりしている	82.1	79.8
授業で分からないことがあるとき、先生や友達に質問している	84.5	80.2
わたしのクラスには、分からないことがあるとき、教えてくれる人がいる	91.6	90.8

・学年別で見た時、5月から12月にかけて増加傾向を示したもの

【1年生】	5月	12月
授業が楽しいと感じる	78.1	82.6
授業では、話し合い活動をすることで、自分の考えを深めたり、広げたりしている	81.7	82.6
わたしのクラスには、分からないことがあるとき、教えてくれる人がいる	89.9	91.8
【3年生】	5月	12月
授業が楽しいと感じる	74.7	80.8
授業では、進んで話し合い活動に参加し自分の考えを説明している	76.5	79.5

学年別に見ると、2学年は明らかな増加傾向を示す項目がなく、変化が見られないか減少傾向となった。1学年と3学年で増加傾向を示す項目があった。

・教職員を対象とした校内アンケート調査

＜指標＞

適宜実施するアンケート調査で、学級の支持的風土や課題設定の工夫、単元計画作成に関する項目の肯定的回答の割合が徐々に向上する。

＜結果＞

今年度は6回アンケートを実施した中から、推移の見えやすいものを選んで表にまとめた。

	4月	12月	2月
道徳の授業で月に1回以上話し合い活動をさせた	88.9	93.4	100
学級の支持的風土を10段階としたとき、自分の学級が「8以上」と感じる	27.8	60.0	76.9
教科の授業で単元計画を1単元以上作成した	30.7	42.3	52.0
教科の授業で単元のゴールを見据えて計画を立てた	84.5	92.3	96.0
教科の授業で月の半数以上話し合い活動をさせた	80.8	73.1	88.0
話し合い活動のための課題設定を毎回工夫した	15.4	23.1	32.0
教科の授業で月の半数以上1人1台端末を使用させた	15.3	53.9	48.0

道徳の授業において、12月には特別支援学級を除く全学級で月に1回以上は話し合い活動が実施され、2月には特別支援学級でも実施できた。

教科の授業においては、今年度は単元計画を各教科で1単元ずつ（各教科で1人ずつ）提出するよう取り組んだが、アンケート調査からはその他にも作成した教員が増加していることが分かり、2月には50%を超える教員が、1単元は作成できた。また本校の様式通りの単元計画は作成しなかったものの、単元のゴールを見据えた授業計画を意識していた教員も含めると、年間を通じて90%を超えたことが分かった。しかし、話し合い活動の課題設定を毎回工夫した教員は徐々に増加しているものの、30%程度に留まった。工夫できたときと、できなかったときがあったと回答した教員も含めると、年間を通じて90%を超えた。

また、教科の授業で1人1台端末を活用させる教員は4月当初は少なかったものの、12月には50%を超える教員が活用させていた。

・校内総合試験

＜指標＞

本校で実施している校内総合試験では、合計点ではなく各設問での正答率と無回答率が公開されているため、正答率が広島県平均を上回った設問数と、無回答率が広島県平均を下回った設問数が 50 %以上になることを指標とする（1年生と2年生のみ）。2年生においてはその設問数が昨年度以上になる。

＜結果＞

	R4 1年生	R5 1年生	R5 2年生
正答率が県平均を上回った設問数割合(%)	16.6	10.8	20.5
無回答率が県平均を下回った設問数割合(%)	29.7	14.4	13.6

５　研究成果

・成果

・「思いや考えを表現していく生徒の育成」について

道徳における話し合い活動では役割分担も教員が指示をしたことから、全ての生徒が様々な役割を経験することができた。すると生徒同士の良いかかわりが生まれるようになり、「ある生徒が発表者になり困っていると、日頃かかわりのない生徒がこっそり手助けをしていた」「肯定的、受容的な反応をする生徒が多く、緊張感なく話し合いができている」といった教員の声もあがるようになった。支持的風土も高まりが感じられるようになり「クラスで良い行動をする生徒を誰もが認める雰囲気が出てきた」と感じる教員もいた。

生徒が活動に慣れてくると教科でも良い動きが見られ、これまであまり話し合い活動を取り入れていなかった教員も「やってみたら生徒が違和感なく動けていた」と感じ取り入れる機会が増えた。

このようにして「授業が楽しいと感じる（１、３年生）」「話し合い活動に参加し自分の考えを説明している」といった項目で肯定的回答をする生徒が増加し、「思いや考えを表現していく生徒の育成」に近づいたと考えられる。

・「試行錯誤しながら」について

今年度の校内授業研究会では「試行錯誤」をテーマに課題設定の工夫を意識した。すると教職員を対象としたアンケートで「課題設定を工夫した」と回答した教員は徐々に増加し、小規模での教科内授業研究会でも、生徒が試行錯誤できたかどうかを協議する場面が増え、教員の意識が高まっていったように感じた。また、試行錯誤できる課題を設定するためには単元のゴールを見据えた授業計画を立てることが必要であることも多くの教員が感じるようになり、単元計画を作成したり単元観をもって授業計画を立てたりする教員が増加した。それにより、１人１台端末を効果的に使用させる場面の検討も進み、教科の授業で日常的に生徒に使用させる教員が増加した。

・課題

・課題設定について

教職員の意識は向上したものの、生徒を対象としたアンケートで「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「話し合い活動をすることで、自分の考えを深めたり、広げたりしている」の項目は減少した。また「授業で分からないことがあるとき、先生や友達に質問している」も減少傾向がある。このことから、話し合いの課題が生徒にとって試行錯誤できるものになっておらず、「教え合い」に留まっていることが考えられる。そして分からない生徒は自ら質問をするのではなく、教えてもらうのを待っているのではないかと推測される。

・校内総合試験について

１年生も2年生も、正答率が広島県平均を上回った設問数が少なく、目標は達成できなかった。2年生の経年変化をみると、１年生のときに比べて正答率が広島県平均を上回った設問数が増加しているが、無回答率が県平均を下回った設問数は減少している。

以上の2点をふまえて、今後は課題の質を向上させ生徒全員が試行錯誤できる話し合い活動を目指すこと、そのために全教員が単元計画の作成に取り組んでいくことが必要である。そのことが校内総合試験の結果向上にもつながると期待される。